

意味の分化と統合

——チヨースーの表現法について——

六 反 田 収

チヨースー(Geoffrey Chaucer)の描く人物の解釈のみならず、作品自体の解釈にしても、一筋縄では仲々に把握し難い複雑さをそなえていることは、よく言われもし、あるいはよく知られてもいる事柄であろう。そして、そのことにチヨースーの表現法が大きく関与していることも、理解の程度はともかく、またこれも容易に首肯し得る点であろうかと思われる。

本稿は、修辭法としては極めて一般的な反復(repetition)と、従来注目されることがなかった、したがってここでは暫定的に、*対照的並置*(antithetic paraxis)と*呼ぶ表現法*とを取り上げ、チヨースーに特徴的に認められるそれらの作用を意味の分化(differentiation)と統合(synthesis)として、実際の例にしたがってできる限り具体的に見ていこうとするものである。ただ問題の及ぶ範囲は広く、断片的な言及の域を出ないことを恐れるが、窮極的にはそれがチヨースーの文学の本質(およびその解釈)に直接関わる事柄であることを明らかにすることに目標が置かれている。

チョーサーの作品に見出される表現形式としての反復を考へる場合、それが集中的に表われる『カンタベリー物語』(The Canterbury Tales)の総序(General Prologue)に關して検討を行なうのがやはり最も妥当であらう。①そして、(反復に強調その他の働きがあることは勿論であるが)そこでの最も顯著で、最も根本的かつ中心的な働きを予めここで要約して述べるならば、それは、同一の表現が様々な対象——ここでは人物——に様々な文脈で用いられることの結果生じる意味の分化であると言ふことができるであらう。それはまた、視点をかえれば、精密な照準を困難ならしめる意味の流動化、あるいは正反對のものをも屢々包含しようとするまでにいたる意味の弾力化と見ることとも当然許されよう。

さて、『カンタベリー物語』に登場する巡礼者中、最初に紹介がなされ、また巡礼の途次、最初に話を行なう「騎士」Knightは、従来、他はともあれ、彼こそは「牧師」Parsonと共に、社会的にも、また人格的にも、いささかも非の打ちどころのない、理想的模範的人物であるとされ、そうした解釈が今なお支配的であると思われる人物であるが、②彼は作中にこう記されている。

A knyght ther was, and a worthy man,

That fro the tyme that he first bigan

To riden out, he loved chivalrie,

Trouthe and honour, fredom and curteisie.

He was a verray, parfit gentil knyght. (I. 43-72)

(一人の騎士がおりました。それも立派な人物で、

はじめて遠征に加わったときから

彼の尊び重んじるものは騎士の道、

誠と誉れ、大度と礼節でありました。

.....

彼こそはまさに、真の、完璧な、気高い騎士でありました。)

「騎士」に関する描写は、ここに省略した部分をも含めて全三十六行に及ぶが、そこには一見批判的否定的な意味を持つと思われる表現は皆無で、否定構文でさえいずれも積極的な賞讃文と受け取れるものである。また実際最初は何れもそう受け取って当然かも知れない。しかし、少なくとも総序の終りまで読み続けるならば、そうした当初の印象は次第に微妙な修正を受けてくるはずである。そしてそれも、専ら同じ表現が幾度も繰り返されて出て来ることの結果なのである。

主な個々の表現について言えば、「騎士」自身にすでに四度用いられている「worthy」は、その他に「托鉢僧」Friar (ここでは二度繰り返されてくる)、「貿易商」Merchant、「郷土」Frankin、「バースの女房」Wife of Bathにも用いられており、「gentil」は「賄方」Manciple (宗教裁判所) 召喚吏「Summoner」(免罪符売り) Pardonerに、また、「He was a verray, parfit ...」の構文は「医者」Doctor of Physic にそっくりそのまま繰り返されて、「good」および同種の言葉('bet' [= 'better'] 'beste' など) は、「牧師」や「農夫」Plowman の他に(この二人について

は、それも予想通りと言つてよいであらうが、「托鉢僧」、「船長」Shipman、「バースの女房」、「召喚吏」にも冠せられてゐる措辞である。

これらはあるいは誰しも容易に知りうる事柄であるかも知れない。しかし、この作品では 'gentil' が 'harlot' (I. 67) と結び付きうる言葉であること、また同様そこで「召喚吏」について用いられてゐる 'a good fellow' (I. 68) は、「話の分かるさげれた男」といったほどの意味から更に進んで、まさしく「悪党」というのと殆ど隔たるところのない言葉となつてしまつてゐることなどは、実際、改めて注目に値しよう(この点については、また後でも触れられる)。それにまた、騎士道にとつて中心的な言葉の一つであり、したがつて倫理的な色彩を濃厚に持つ 'curteis' (courtous) の今される次の二文、つまり、一つは「近習」Squire についての

Curteis he was, lowely and servysable. (I. 99)

(彼は礼儀正しく、謙遜で、奉仕の精神を弁えておりました)

とあるのと、もう一つはそれが殆どそのままに反復される「托鉢僧」についての

Curteis he was and lowely of servyse. (I. 250)

とをこのように直接並べて見ると、形式が同じなだけに、そこに盛られた内容の対蹠的な開きがこうした言葉の用い方をまさにスキャンダラスにさえ感じさせる。しかし実際スキャンダラスなのは、この場合は勿論のこと「托鉢僧」の「礼儀正しさ」のありようの方なのである。「どこであらうと、儲けになる限りは」And overal,

ther as profit sholde arise (I. 249) という但し書きが、紛れもなく後者の引用文の前行に付されている。聖職者たる「托鉢僧」のその礼儀正しきなるものは、実に採み手しきりの卑屈な商人流の——あるいは乞食流の——打算的な腰の低さでしかないのだ。しかし考えてみると、この「托鉢僧」はまさにそうであったからこそ、僧院随一の聖Chin (*besie begere*) ともなり得たのであった。

こう見てくると、本来積極的肯定的なはずの形容辞が、おしなべて道徳的含意の稀釈された、ここでは単に登場人物たちのそれぞれの職業における「有能さ」を示すにとどまる言葉なのではあるまいかという印象を、われわれは強く受ける。そしてこの印象は、次に述べる文体的特徴——これも専ら表現の反復に由るところの特徴である——によって更に補強されることになる。つまり、総序全体に及んでいる、「……をしかと心得ていた」、「……にあまねく通じていた」という意味の *'wel koude…'* やその変形、ないしは同種の表現(例えば *'knew wel'* *'knew alle…'* *'wel wiste'* など)の優に二十例を超える頻出ぶりと、更には *'yemanly'* *'ful semyly'* (これは三度、いずれも「尼僧院長」*Priores* に用いられてゐる)、*'estachich'* *'manly'* などの類語の反復がそれであるが、それらが人物の職業人としての能力や社会的地位、つまりは「……らしさ」を強調するものであることは勿論である。

とすれば、われわれ読者のこうした不審は、当然のことながら、「騎士」の部分にも遡って行かざるをえない。「騎士」についての描写も『カンタベリー物語』全体の文脈の中で考え、そのみを別枠扱いにするわけにはいかない以上、彼にたいして例えば *'worthy'* という語が幾ら繰り返されていようとも、いやそれが幾度も繰り返されているがためにかえって疑義が生じることにもなる。そしてそれが単に表現にたいする疑義にとどまらず、そこに描かれた「騎士」の人格や、その理想性についての疑惑にまで進むのは、こうしたテキストの読みだけか

らしても、避け難いことのように思える。^③

では「騎士」と並んで同様理想的人物像とされる「牧師」についてはどう考えるべきであろうか。この興味ある問題に一つの光を当てる意味で、表現の反復の点からのみ見たその描写の特徴にここで簡単に言及しておくとは、無意味ではなからう。従来それは諷刺を感じさせない素直な文章とされてきたものである。

「牧師」についての描写の示す最も著しい表現上の特徴は、否定構文と接続詞 'but' の多用であると筆者は判断する。参考までに頻度数を示せば、全五十二行中に 'but' が八度（他に 'though' に導かれる譲歩節が一例ある）、否定辞 ('not', 'ne', 'no', 'noon', 'nought', 'nowher' など）は十六度に及んでいる（同一文中に例えば 'ne...not...' というように否定辞が重複する場合も多く、したがってこの数字は否定文の数を示すものではないが、右のような数え方が全体的な傾向をより良く示しているよう）。

すでに見たように、「騎士」の理想像が限りなく不透明に近づいて行くものであったのに対して、右に述べた著しく際立つこれらの特徴は、「牧師」のそれがその言葉の持つ本来の意味の理念 (idea) にとどまっています。現実の裏付けを欠いたものであることをまさしく暗示していると考えられよう。事実、『カンタベリー物語』の他の部分、つまり巡礼者たちの語る話の中に出て来る村牧師は、騎士の場合も殆どそうであるように、相当にいかわしい人物なのである。^④

また物語の最後になされる「牧師の話」(The Parson's Tale) にしても——（ただしこれは最早「話」taleではなく、贖罪についての「説教」sermonであり、神学的な「論考」tractである）——主題の点では巡礼の旅に極めて相応しいと見ることはでき、また事実、物語を大団円に導きはする。しかし、率直に言って、その分量といふ文体といふ、いずれも他の部分との均衡を欠き、真实性も薄く、一体これが旅をしながら語られる類のものであろうかと疑わ

れてもしかたのないものである。この部分の真偽性が問題とされるのも故なしとしない。

表現の反復が意味を分化させる、つまりは、異なった意味を派生させる働きを持つという認識から、論は「騎士」や「牧師」の理想性についての信頼性と限界性にまで及んだが、作者チャーサーが騎士道精神やキリスト教精神の否定を意図しているのではないことは勿論である。職業や社会的地位がなんであれ、彼にはそれぞれの人物のあるべき理想像が、現実をまざまざと照らし出すものとして、心中に確然としてあるのであって、それを実際に物語に描かれる人物との落差を自由な精神の働きによって明瞭に先ず意識すればこそ、そこに限らない彼のユーマアやアイロニーも実際生まれて来ているのである。これまで見てきた言葉の使い方も、まさにそうしたチャーサーの精神の自由さ柔軟さを物語っている。^⑥

(二)

反復されることによって言葉の意味が集中性を失い、場合によっては正反対の意味に限りなく接近することがありうることは、これまで見てきた通りであるが、しかし単なる反復によって言葉の意味が完全に逆転することは、歴史的過程においてならばいざ知らず、一つの作品の中では起こりえないことであろう。先に触れた例で言えば、『カンタベリー物語』の「召喚吏」に用いられている 'gentil harlot' (I. 647) は、たとえ限りなく base rascal の意に接近しようとも、それと完全に一致することは遂になく、しかもここでは主辞・限定辞の相違があつて、これはいわゆる撞着語法 (oxymoron) に結局はとどまる。

しかしながら、これが例えば同等に名詞化され、gentlesse [= nobility]・harlotrye [= wickedness] いや全く句

読点なしに *gentilise hartlorve* とただ並べてあればそうであろう(例が不自然めくが、決してそうでないことは直ぐに分かってしよう)。そうした場合には、両者を隔てる壁を突き破り、あるいは位相の差を一気に越える飛躍が生じうることも十分に考えられるであろう。ここで筆者のいう「対照的並置」とは、つまりはこのように、(程度の差はあれ)対照的な意味内容を持つ同等の表現(語・句・文など)を接統詞なし(*asyndeton*)に並列したものであるが、ただしそこに見出される矛盾対立が単なる矛盾対立にとどまらず、それを統一する視点がそこに示されており、あるいはそれが一段と高い統合・総合へと向かう契機となっているものを問題にするのである。事柄の性質上これは頻出する表現法では決してない。しかしそれだけにチョーサーの作品に極めて効果的に用いられていることが注目される。実際の例を見ていこう。

次の例は形式上の相違があつて典型的とは言ひ難いものであるが、「荘園管理人の話」(*The Reeve's Tale*)に登場する粉屋シムキンの女房について語られている部分である。

A wif he hadde, ycomen of noble kyn;

The person of the toun hir fader was. (I. 3942-43)

(そいつは女房持ちで、女房は貴族の出であつた。

村の牧師がそいつの女房の親父だったのさ。)

村牧師＝貴族、牧師＝親父というのは、全くの矛盾でしかない。牧師に結婚は許されなかつたはずで、これはこっそりと(いや恐らくは、この牧師の場合は、恥知らずにも堂々と大びらに)多分同じ村に住む女に産ませた娘なので

ある。あろうことか教会の財産を私する親父も親父なら、娘も虚栄心の強い貴婦人気取りの女で、またその亭主が高慢凶暴な男であったことは、この物語が皮肉をこめて十分に明らかにするところである。それにしてもこの村牧師 (person of the town) は、総序で見ると貧しい村牧師 (poore person of a town) とはなんと隔った存在であることか。だが、作者の意図する、あるべき理想の姿からは程遠いこうした聖職者のありようにたいする諷刺の鋭さは、「女房は貴族の出であると亭主は称していたが、実際は、村の牧師が……」といった説明付きでない、単に並列的な文の組立て——(引用文中のセミコロンはあくまで現代の編纂者の手によるものである)——に殆どよることを知るべきであろう。

次に引用するものは、総序の「托鉢僧」についての描写の冒頭部分である。

A Frere ther was, a wantowne and a merye,

A lymytour, a ful solempne man. (I. 208-9)

(一人の托鉢僧がおりました。ふざけ好きで快活で、

縄張り持ちの托鉢僧で、まこと厳肅なる男でありました。)

この訳は不備を承知で仮りに宛てたものに過ぎないが、原文中の 'wantowne' (wanton) や 'merye' (merry) は、'solempne' (solemn) と矛盾なく整合するであろうか。

無論このような場合には、文章にはっきりとした一本の線が通るように、読者の頭の中で大なり小なりいうならば地均しが行なわれるのが普通である。そして、チョーサーにあってはその結果が必ずしも牽強付会と評しえ

ない場合が殆どで、それをもって彼の言語表現の巧みさの有力な証拠とすることができるほどであることも事実である。ロビンソンがこの‘wantowne’を‘jovial」とし、‘solempne’を‘festive」と解して、これらを殆ど類語反復(tautology)——あるいは冗語(redundancy)と言へべきであらうか——にしているのもその一例と言つことができよう。ただし彼は、それに続いて、この‘wantowne’には‘wanton’の現代的な意味もあり、また‘solempne’は「壮大な(‘grand’)、堂々たる(‘imposing’)、勿体ぶった(‘pompous’)、荘重な(‘solemn’)」の意味をも含むと註していることを見落しては公平を欠くことになる^⑥。

引用した二行に続く部分で見ると、この托鉢僧は世辞もうまく、陽気で、人当りのいい、そもそも自分の職務とじゃれ合い戯れ合っている(‘rage’)態の人物で、「百合のように白い」頸の持ち主ながら、ただの優男なのではない。「加えて力の強いこと闘技士のようなであった」(I. 239)——思うに、またそうでなければ、何人もの若い娘の結婚を自腹を切つて取り持ったり、金持ちの奥様連と親交があったり、どの村のどの酒場の女とも知り合ひであったりはすまい。調停裁判では場違いにも大学者か法王のように着飾り、權威ある態度で——甘たるい声ながら——弁舌を揮つたろうことは後段に十分窺えるところで、その上、僧院随一の稼ぎ頭(‘Beste begger’)で、有能——あるいは有徳(?)——をもって聞こえた(‘vertuous’)、高い位にある(‘noble’)、偉い(‘worthy’)坊主であったのである。

ということとは、引用した最初の二行は残り六十一行の内容をすでに見事に凝縮して示していたということに他ならない。つまり、表現の矛盾は、「托鉢僧」(あるいはこの「托鉢僧」によって代表される人々)の最早言い抜きの許されない矛盾の容赦ない剔抉であった。この僧が琴を弾き、歌を唄うときの「眼の輝きは、まさしく／霜夜の星光さながらであった」(I. 269-70)とあるところなどは、まさにこの人物の端倪すべからざることを示している。

いや、チヨースーに見出されるこの表現法には、一人の人物の描写のすべてではなく、一つの作品全体の解釈と評価のすべてがその部分に懸っていると思われれるものさえある。

『トロイルスとクリセイデ』(Troilus and Criseyde)では、¹⁵はたして作者は現世の愛を否定し、¹⁶確実な愛は神の愛のみということをただ言わんとしているのか、たとえ悲恋に終わったにせよ、若い男女の愛を暖かく見守る視点を彼は持っていたのか、またクリセイデは単に浮気な裏切り女として断罪さるべき女性と解すべきなのかどうかということがいつも問題にされる。そして、『トロイルスとクリセイデ』の投げかけるこうした古くまた常に新しい問題を考ふる学者の目がたえず注がれてきたのが、作中クリセイデの性格を述べた部分の中の

Tendre-hearted, slydynge of corage (V. 825)

(心優しく、移り気だ)

という一行であった。いやそれも、ただその後半部のみに注がれたのであったと言うべきかもしれない。しかしこの一行を前後矛盾なく解釈できるであろうか。

筆者は別の機会あってこの作品を論じた際に、この部分にも言及し、この後半部をむしろ「情に脆い」、あるいは「涙脆い」と解さざるをえないこと、つまり、作品の全体的な構成からすれば、この後半部は前半部に寄りかかっていると受け取れる書きぶりがなされていることを述べたが、¹⁷全五巻総八二三九行中の僅か一行に過ぎないとしても、この一行の中で‘tendre-hearted’と‘slydynge of corage’¹⁸とが、それぞれ独立して——繰り返すまでもなく、写本には中間のコマなどは無い——恐らくは永久に向い合っているという事実は重い。

クリセイデが不実の罪を負う女性であることは、チョーサーにとっても最早如何ともし難い。歴史的“事実”であった。しかしまたチョーサーの描くクリセイデが、心の優しさをも含めて女性的な魅力を十分にそなえた女性像となっていることも否定しえない事実である。したがって、一つの考えとして、クリセイデにしてもなまじ情け深いたちであったおかげでトロイルスの愛を受け入れ、やがてディオメデスに靡き、更には言わずもがなの言い訳を手紙の中でしなければならぬ破目にもなったのだという受け取りかたも出て来る。事実これは、いかにも単純に思えようとも、そうとして一概には否定し去ることのできない、それ自体かなりの妥当性を持った解釈である。しかし『トロイルスとクリセイデ』が容易に統一的な解釈を下すことを阻んでいる理由を突き詰めて考えると、クリセイデの女性的な魅力と同時に彼女の罪深さのありようを十二分に、しかも破綻なく描き出すということはそもそも至難の業で、何かそこに辻褄の合わない所が出て来るのはやはり避けられないということであるかもしれない。しかし、またそれにもかかわらず、読者が作品に描かれた彼女のありように全体として真実性を認めることができると思えば——筆者はそれができると信ずる者であるが——そのことは先ずもって彼女の全てを受け入れる作者の視点を、読者もまた同様認めたからであるはずである。

チョーサーはクリセイデの罪を憐れみをもって許そうとする。引用をもって示せば彼はこう言っている (ex-cuse' がそこで二度繰り返し返されていることにも注目したい)。

...if I myghte excuse hire any wise,

For she so sory was for hire untrouthe,

Twis, I wolde excuse hire yet for routhe. (V. 1097-99)

(とにかく私に彼女が許せるものなら、

己れの不実をひどく悔いたのだから、

私は真実憐れみをもって許してやりたい。)

だがそうは言っても、彼に彼女の罪を許す力、彼女の罪障を消滅させる力があるわけではなく、そのことを彼も自覚していることは構文からも明らかである。しかし、作者がそうした態度を終始一貫とり続けていること、そして他ならぬそのような彼の憐れみの態度のみが唯一先に引用した半行と半行を一つに繋ぎ、クリセイデ像に統一を保証しているのであることをわれわれは知らねばならない。他所に批判の基準を求める前に、先ずわれわれはそのことを認め、それをもってすべての『トロイルスとクリセイデ』論の出発点とすべきである。

ところで、いわゆる「結婚論争」(the Discussion of Marriage)と称される、具体的には夫婦間の支配権・主導権の所在をめぐる問題は、『カンタベリー物語』の中を流れる確かに大きなテーマでありながら、物語の中では結局結論が出されずに終わっているという印象がある。その責任の一端は他ならぬ「牧師の話」が負うべきものであろう。単に夫婦間の支配権の問題にとどまらず、男女問題・結婚問題一般に関連し、ひいてはチャーサー自身の人生観・世界観にも直接触れるかと思われるテーマであるならば、最後に「牧師」が何らかの結論を下すことが期待されて当然である。ところが、そこではただ「妻たる者、その夫に従え」 a woman shoulde be subget to hire housbonde (X. 930) といふ教会のドグマが示されるだけである。しかし、結論とは言えないまでも、少なくともその方向を示唆するものが、「尼僧付き司祭の話」(The Nun's Priest's Tale)の中に、甚だチャーサー的な形で提出されていると見ることはできないだろうか。

「尼僧付き司祭の話」は、短篇ながらも全体にみなぎる喜劇的精神と話術の巧みさのために、『カンタベリー

物語』中最も広く人々に好まれる話となっているものであるが、その主人公の雄鶏チャンテクレールは、雌鶏の中で最も美しいペルテロートに向ってこのように言う。

“... al as siker as *In principio*,

Mulier est hominis confusio,—

Madame, the sentence of this Latyn is,

“Woman is mannes joie and al his bis.”

(VII. 3163-66)

〔『ムリエル・エスト・ホミニス・コンフーシオ』〕

これはまったく聖書の言葉同様確かな真理だ…。

ねえ、お前、このラテン語の意味は

“女は男の喜び、男の幸せのすべて”ということなんだよ。〕

言うまでもなくこのラテン語は「女は男の身の破滅」という意味であろうから、ここでは正反対の説明が与えられていることになる。勿論これはもうそれだけで十分滑稽である。だがこれを評して、ペルテロートの無知に乗じて彼女を揶揄しようとするチャンテクレールの優越的なペダントリーとするならば、それはむしろ誤解と云うべきであろう。^⑩

物語の進行の中に埋もれて見え、しかもラテン語とその翻訳という意外な形で提示された二つの対立的な女性観がまさしく対照的並置の状態に置かれているというそのことからしても、そこには笑いを触発するエネルギー

と共に、両者の矛盾対立を克服し、両者の統合へと向かわんとするエネルギーが秘められていると見て、最早不自然ではないであろう。「尼僧付き司祭の話」はいわゆる「結婚グループ」(the Marriage Group)の最後に来る話である。勿論、「結婚論争」が賛否両論の積み重ねとして進展するものであった以上、その方向は最初からすでに示されていたと言えるかも知れない。また女性の支配権の強力な主張者である「バースの女房」の言葉も、一方では夫婦の愛情の機微を伝え、男女間の対立が根元的ではあっても絶対的なものではありえないことを明らかにしていた。しかしわれわれはこのチャンテクレールの言葉の含む矛盾に笑いを誘われながらも、またそれと同時に、そのラテン語の意味はもしかするとチャンテクレールの解釈通りなのではあるまいかという気はして来ないだろうか。もしそうだとすれば、弁証法に類する説明など持ち出さずとも、すでにそのことがこの表現法の勝利、チヨースーの筆の勝利を告げている。

註

① チョースーにおける反復については、すでに榊井迪夫博士の豊富な例を挙げての論者がある(Chaucerにおける表現の反復)、『チヨースー研究』、研究社、一九六二、二二九—四九頁)。ただ本稿においては、この表現法の効果に着目するものである。

② これは単に一例として挙げるに過ぎないのであるが、最近の論文でも、「未だ誰も欠点を見出せずにいる騎士」the Knight, with whom no one has yet been able to find fault with (John Gardner, "Signs, Symbols, and Cancellations," John P. Hermann et al. (ed.), *Signs and Symbols in Chaucer's Poetry*, The University of Alabama Press, 1977, p. 198)と云った評言を読むことが出来る。

なお、以下チヨースーからの引用は、全てロビンソン版全集(F. N. Robinson, *The Works of Geoffrey Chaucer*,

Second Edition, Oxford University Press, 1957) に拠る。

③ 遂にと言つてよかるうが、「騎士」について従来の考えを完全に否定する説が先頃出された。それによると、彼の参加した戦いは十字軍、聖戦とは言い条、盜賊団と呼ぶほうがより相応しい無頼な仲間達と徒党を組んでの、金儲け目当ての遠征であり、彼は節操などいふさかも持ち合わせていない騎士の成れの果てであるとする (Cf. Terry Jones, *Chaucer's Knight*, Eyre Methuen, 1980)。書評などから判断すれば、そのような見方・解釈は未だ論証不足とする受け取りが一般的であるように思われるが、その帰趨は甚だ興味を持たれる。

ただ、著者の意図とは違つてこようが、この書物はチョーサーの描く「騎士」それ自身ではなく、むしろ当時の騎士なるものの実態を赤裸々に示したものとして読むならば、この書物の価値は直ちに明らかとなる。しかしながら、その偶像破壊的な衝撃は、欧米の学者には容易に克服し難いものがあるかと察せられる。

④ 他は精々数度にとどまっているのにたいし、ただ「免罪符売り」の描写中の七度の *pen* は注意を惹く。概して逆接の度合がそこでは比較的軽いと言えるであろうが、その数の多さは、この人物の実態と彼の教会内での高い地位との不似合を著し示している。

⑤ 「莊園管理人の話」(The Reeve's Tale) に出て来る村牧師 the person of the town (I. 3943) がそれである (これについては再び口で触れられよう)。また騎士の場合には、「ハースの女房の話」の「好色な、騎士 a lusty bachelor (III. 882) 「貿易商人の話」の「立派な、騎士 a worthy knyght (IV. 1246) などの例を見よ。こうした例は同様学備についても挙げることができ、理想と現実との間の亀裂はすでに物語の世界においても歴然たるものがある。

「騎士」について更に言えば、巡礼の一行が「宿屋の亭主」Host の提案を容れ、続いて最初の話し手を決める籤引きが行なわれて、それが「騎士」に決まったことを述べたくだりに

Were it by aventure, or sort, or cas,

The sothe is this, the cut flit to the knyght. (I. 844-45)

意味の分化と統合

(偶然なのか、運なのか、はたまた巡り合わせか、

実際、籤はたまたま騎士に当たった)

とあって、その類語の反復が滑稽感を与え、微笑を誘うが、これも籤の結果と彼の人格とは別問題であることを暗示するものであろう。

⑥ この点に関連して、テキストの解釈上の問題を一つ挙げると、「修道僧」Monkの口から出る、実に修道僧にあるまじき言葉にたいする語り手ジョーサーの応答

And I seyde his opinion was good. (I. 183)

(そこで私は御卓説と申しました)

が皮肉であることについての誤解はなからうと思われるが、一方、破門(curs)の恐れるに足りないことを述べた「召喚吏」の言葉にたいする語り手の

But I woot, he lyed right in dede. (I. 659)

(それが真っ赤な嘘なことは私にも分かる)

に始まる部分を、破門についてのまともな作者の反論とするのはどうであろう。これが前者の例とは同意・否定と方向こそ逆ではあっても、共に反復に類する表現であることに留意すれば、これは何よりも先ず、「召喚吏」のなんでもないという言葉とは裏腹に、泣く子も黙る彼の呪い(curse)、つまりは彼に呪まれること(そしてそれが宗教裁判に繋がること)の恐ろしさを、語り手が皮肉をこめて言ったものと解されなければならない。

⑦ このように比較に用いうることから、「牧師」の示す理想像が現実批判としての価値を持つものであることが知られる。ただし作者は非現実の理想世界に憧憬の眼を向けているのではなく、あくまで現実を凝視しているのであることは強調されねばならぬ。

⑧ F. N. Robinson, *op. cit.*, p. 656 参照。また先に引用した 'harlot' につづいてスキートの付した註 "fellow, usually one

of low conduct ; but originally merely a young person, without implication of reproach" (W. W. Skeat, *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*, Oxford University Press, 1894, V [Notes to The Canterbury Tales], p. 53) 参考。
因に Norman Davis *et al.* (comp.), *A Chaucer Glossary*, Oxford University Press, 1973 に於て "これだけな "fascal" (p. 71) とあるだけである。

⑨ 拙論「クリセイデの心変わり——『トロイルスとクリセイデ』論——」(御興員三編『チヨーサーとシェイクスピア』、南雲堂、一九八三、一一七—六一頁) 参照。ここでは作品の創作過程に多く注意が払われ、特に表現形式の面から作品を論じたわけではなかった。未だ不十分ながら、本稿の関係部分をその補説とも受け取っていただければ幸いである。

⑩ 一つには、チヨーサーが、男女を問わずこの言葉の意味を解しうる読者・聴衆を直接的な対象として、創作を行なっていることを考慮すべきである。更には、このラテン語にも、「女は男を恥入らす」、つまり男は女の前では頭が上からぬという、したがって、結婚論争、とも関連し、また女性にとって恐らくはより好ましくもある別様の解釈を容れる余地がなくはないと考えられる。このような表現のありようは、すでに述べたように、甚だチヨーサーに特徴的なこととして理解されるべきものである。

⑪ 「尼僧付き司祭の話」の「結婚グループ」の中で占める位置は、直接『カンタベリー物語』全体の配列の問題と関わって、実際は簡単には論じえない、恐らく最終的な決着を見ることはないと思われる事柄であるが、ここではロビンソンの採用した順序に従っている。